

大島サキと活水における最初のリバイバル

二 瓶 淨 幸

Saki Oshima and the first revival at Kwassui

Kiyoyuki NIHEI

Abstract

During its 135 years of history, Kwassui Gakuin has seen several revivals. The backdrop to these revivals and the details of them, however, have not garnered much attention. Here, I would like to call attention to a pivotal figure in both the initial Kwassui Gakuin revival that took place in 1883, as well other related revivals that took place the same year, Saki Oshima. After her experiences with revivals, Mrs. Oshima went on to work as a missionary while attending Bible Woman's Training Department and then spent the rest of her life as a Bible Woman. Grounded in her sincere faith, her deep prayer and devoted actions never withered, even in her last days. In this paper, I will outline the first revival that took place at Kwassui, including its backdrop, as well as bring to light the life and career of Saki Oshima, who lived her life based on revival.

はじめに

「活水は多くの祈りの子です。この偉大な学校の将来は、その過去を作ったと同じ精神で導かれますように」¹。この祈りは、活水の創設者であるラッセル女史が、創設の任務を終えて離任する前に活水での歩みを振り返りながら、「アメリカ・メソジスト監督教会婦人外国伝道協会（WFMS）」へ送った報告書の結びである。ラッセル女史による祈りは、創設期の苦難を乗り越えたさまざまな歴史的事実によって裏付けられている。本稿では、その事実のひとつである活水リバイバルに注目する。『活水学院百年史』は、明治期を中心にリバイバルが数度起こったことを報告している。とりわけ1883年に起きた最初のリバイバルは「神学科」創設につながる契機となった。その意味で、それ以後の活水におけるキリスト教教育を方向づける重要な役割を果たしたといえる。

その発端を開いた大島サキは、それによって創設された神学科の第一回卒業生となった人物である。大島はリバイバル体験の後、神学科在学中から宣教師の活動を支え、婦人伝道師として生涯をまっとうした。彼女の篤実な信仰にもとづく深い祈りと献身的な活動は、最期まで衰えることはなかった。また、活水最初のリバイバルは、その年、全国規模で生じたリバイバルと関連するが、これについてはこれまで十分に意識されてこなかった。本稿では、活水における最初のリバイバルをその背景を含めて概観し、リバイバルに生きた大島サキの生涯を明らかにしたい。

1. その背景

活水における最初のリバイバルは1883年だが、この年は全国的な規模でリバイバルが生じたという点で、日本プロテスタント史上極めて重要な年といえる。当時のプロテスタントの教勢は、信徒数でいえば1882年には4,367人に過ぎなかったが、1883年の全国的なリバイバルの結果、翌1884年には10,775人と倍増している。これのみをみても、その年のリバイバルがプロテスタント教会に

与えた影響の大きさがわかる²。このリバイバルは長老派を発火点としたが、その後はメソジストや組合教会を軸に連鎖した超教派的現象であった。また、かなりの数のミッションスクールがその舞台となっている。本多繁の「米国メソジスト監督教会外国宣教機関と明治中期迄の日本宣教」³には、活水を含むプロテスタント系学校への影響が次のように記されている。

青山では学内回心者十五名他に信徒数の多数急増、横浜では六ヶ月間の受洗者九六名、築地女学校では三月十八日の受洗者廿名に続いて廿七名以上が回心、全校生六六名中四七名が精神的救いを体験した。長崎の活水女学校では少女二名が回心し続く日曜日に一八名が受洗し、男子校（カプリー・セミナリーのこゝ—筆者注）でも類似の現象が見られた⁴ … 日本宣教史上最も輝かしい成功の年であった … 活水女学校ではE.RussellがEmma Everdingの協力下に在籍八〇名の2/3を基督者とし、Jennie. M.Gheer は聖書婦人教育（バイブルウーマン）の為の組（クラス）を有していた⁵。

1883年のリバイバルは、横浜の「日本基督公会」（現日本基督教会横浜海岸教会）で守られた初週祈禱会に端を発する。この初週祈禱会の伝統は、1860年、日本人の救いをテーマに「福音同盟会」に属する横浜在住の宣教師と外国人信徒によって守られたことに由来する⁶。その後、1872年旧暦新年（陽暦2月）横浜の宣教師や外国人信徒たちが、日本人救済のために熱心に祈る姿に触れてキリスト教への関心を高め、J.H.バラ塾で学んでいた日本人青年たち数名が初週祈禱会に加わるようになった。やがて彼らは、自分たちの主催で日本人救済のための祈禱会を開きたいと申し出た。それまでの宣教師や外国人信徒による祈りの蓄積と熱心な姿勢が彼らの行動を促したといえよう。青年たちによる初週祈禱会は次第に熱を帯びた。そして、これまでにみられなかった特別な状況が生まれたのである。その経緯について、アメリカ・オランダ改革派教会外国伝道局総主事の任にあったJ.M.フェリス（フェリス女学院の校名の由来となった人物）は、以下のように報告している。

集会は驚くほど盛んになり、何週間も続き、2月末にまでいたりしました。1～2週間後、この国民の歴史では初めてのことで、彼らは、キリスト教の祈禱会で膝をかがめて、感動しつつその顔は涙にぬれながら、神に祈ったのです。神がかつて、また信徒たちを取り巻く人々に御霊を賜ったように、日本にも聖霊を与えてくださいとこれらの祈りは熱烈そのものでした⁷。

この結果、1872年3月10日、横浜にバラを仮牧師とする日本人信徒11名の「日本基督公会」が誕生した。その流れを受けるようにして、同年9月20～24日横浜居留地のヘボン会堂において「第一回宣教師会議」が開催されている。これは日本最初の在日宣教師会議だが、長老派及び改革派所属の宣教師を中心に宣教師14名、横浜在住婦人宣教師4名と宣教師婦人の陪席者を加えても20数名という小規模の会議だった。議長にはJ.C.ヘボンが選出された。参加者としてはJ.H.バラ、S.R.ブラウンなどが名を連ね、その中に長崎と関係が深いH.スタウトもいた。主な議題は聖書の共同訳委員の選出だったが、協議を通して「キリストにあって一つ」という理念が確認され、基督教会の公同性のある名称を堅持することが決議されている⁸。おそらく、バラ及び横浜を拠点として活動していた宣教師たちは、この会議で日本人青年たちによる初週祈禱会以来の状況を熱弁したと思われる。

横浜で燃え上がった祈りの伝統は、1883年から始まる全国的なリバイバルの導火線となった。後に大リバイバルと呼ばれるこの出来事は、横浜海岸教会（1875年に日本基督公会から改称）の牧師バラがみた夢に端を発する。その夢は以下の通りである。

断崖絶壁の頂に、羊の群れが居た。それは見るからに危険千万で、一步踏み誤れば、千仞の谷底に転び落ちそうなのだ … 牧羊者は何処に、又何事をしているにやとみてみれば、こはそもいかに、遙かかけ離れたる彼方に、杖を放下して、心地よげに昼寝を貪り熟睡してゐた。バラ師は愕然として目覚めた。然かもそれをただ南柯の一夢とは思わなかった。あゝ眠れる牧者！そはまさしく我がことにあらずして何であるかと、甚たく自己の伝道者としての責任感に打たれしことを

告白した⁹。

この夢はバラの宣教師としての召命感を激しく覚醒させるものであった。横浜海岸教会における初週祈禱会でなされたバラのこの告白は、たちまち門下生によって共有され、福音宣教の熱気となった。『日本基督教会 横浜海岸教会史年表〈1〉』によれば、「バラ塾の学生篠崎桂之助、旧暦で初週祈禱会（2月9日）を持つため小会堂を正午から一時迄使用を申し出た」¹⁰。また『植村正久と其の時代』第一巻では「陽暦の二月、丁度陰暦の新年時分であった、この學校の生徒が、自發的に、西洋人が行って居るのと同様な祈禱會を、日本人のために開きたいと請願した。そこでバラは彼らの要求に應じ、進んで此等の催しに参加した。その結果、天の窓が日本の上に始めて開かれ、彼の小さき教室には恵の雨が注がれて、バラの心に大いなる喜びを齎した」¹¹。

バラはこのリバイバルについて、喜びをもって海外の教会へ次のように報告している。「祈りの週以来、絶えざるリバイバルが続いてきました…それは東京にも広がり、さらに遠くの地方にも広がり始めています。その良き実は、より高きクリスチャン生活の標準、神の言葉から生ずる愛、キリスト者の一致、そして魂への愛において顕著に表れています」¹²。バラと門下生の祈りに端を発するリバイバルはたちまち近隣の教会、そして東京に伝わった。東京では築地居留地内のメソジスト系の「東京英和学校（青山学院の前身）」、「海岸女学校（青山女学院の前身）」でリバイバルが起り、多くの生徒達が回心した¹³。さらに隣接する長老派系の築地女学校（女子学院の前身）にもその影響が及んでいる。

このリバイバルの流れを受けて4月16日から21日までの5日間、大阪の川口居留地で「第二回在日宣教師會議（General Convention of the Protestant Missionaries in Japan）」が開催された¹⁴。この會議は一般に、大阪宣教師會議または在日プロテスタント宣教師協議會と呼ばれるが、『活水學院百年史』では日本在留新教宣教師大会と訳している。参加者数は全国各地で宣教活動に従事するプロテスタントの宣教師106名（男性宣教師58名女性宣教師48名）と、第一回宣教師會議より大規模な會議となった。議長には第一回宣教師會議同様、J.C.ヘボンが選出されている。

會議初日の朝、バラは使徒言行録第1章8節「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる（新共同訳）」をテキストに「われわれの活動における聖霊の必要性とその約束」と題する説教を行った。この説教は名説教として語り伝えられている¹⁵。内容はバラ自身の年頭の夢に起因する告白を前提にしたもので、全体を通して独特の靈的雰囲気を伴っていたことは、その場に居あわせた多くの人が共通に感じたという¹⁶。バラによる説教の要点は以下の4つに集約される。①私たちの間では「聖霊による一致」（エフェソ4:3）を成就することが必要。②外国と自国の働き手たちの中の霊の一致。③故国の教会と日本における教会の一致。④外国人の働き手たちと、内外の働き手たちと教会の一致よりも、もっと強い一致の為の力が必要である。つまり、バラの説教のキーワードは「一致」であり、これが會議を導く基本理念となった¹⁷。これをベースに様々な討議がなされたが、なかでも会期4日目の4月19日、アメリカンボード宣教師団のH.H.レヴィットが提出した「日本人教会の経済的自立問題」が注目を集めた。レヴィットは、これまでのミッションボードによる日本の教会への資金援助は、教会に対しても、伝道者に対しても、学校に対しても一切するべきではないという厳しい提案をした。宣教師の役割は模範的な信者、すなわち「自己をキリストに献げ、自己を犠牲にする人」を育成することであり、経済的援助は回心の動機を不純にしかねないと考えていたのである¹⁸。また外国資金の援助は「個人的奉仕の念」を喪失させ、「教会員の資質を低下させることになる」と述べた。しかも資金援助は、現地教会が果たすべき責任感を代行することになり、現地教会の無能力を立証することを意味すると力説した。そして、外国資金の援助は現地教会を外宣教師の管理へと移行する恐れがあり、両者に不快な関係をもたらす結果にもなると指摘したのである¹⁹。つまり、宣教師及びミッションボードと日本の教会の従属関係

を解消することが日本におけるキリスト教成長のために不可欠と説いたのである。レヴィットの主張は、宣教師会議の基本理念である「一致」の観点からも重要な意義をもつ。すなわち、両者が経済的援助を介して対等の立場を損なわれてきた経緯から脱却し、真の意味での「一致」を獲得するために避けて通れないプロセスであることを具体的に示したからである。しかし、このようなレヴィットの提案は、当時の状況下ではあまりに急進的だったために反論が相次いだ。同日の夜、この課題は日本人と宣教師による統合会議で引き続き討議された²⁰。その席上、レヴィットと親交があり、その影響を受けていた日本基督組合教会牧師の沢山保羅が持論の「日本教会費自給論」を展開した²¹。沢山は「新約書に、耶蘇伝道者を遣わすに当り、曾て金銀を出して道を拓の助けとなすこと教えしことなし、又使徒等の建てし教会も自給なりし証はあるも反対の証はあらざるなり」²²、「自給することによってイエス・キリストの苦しみに倣い、イエス・キリストのように他者に尽くす教会となる」と、レヴィットの提案に呼応した。沢山の講演原稿は日本語と英語で翻訳されたので、日本に留まらず世界的な反響を呼んだ。沢山の主張は宣教師無用論と短絡して困惑する宣教師もいたという。少なくとも、ミッションボードによる資金援助が、日本の教会には不信仰と捉えられたことに対する戸惑いが生じたのは事実であった。その反面、沢山の自給伝道論が日本の教会の自主性を問う契機となったことも確かである²³。この議論は、会議の基本理念となった「一致」が、単に宣教師及び宣教師団と日本人教会との融和という表面的次元ではなく「一致」の本質や具体的要件にまで踏み込んだ点で意義深い。

この宣教師会議では激しい議論が展開されたが、初日のバラによる説教に導かれて宣教師団と日本人伝道者の真の一致のための土台が形成された。このような流れを生んだ背景には、横浜や東京でのリバイバルの急速な進展があったと推測される。そして、10年以内か19世紀末までに日本はキリスト教国になるに違いないという昂揚した空気が会議を支配した。宣教師会議の「一致」の精神は、キリスト教新聞に掲載された報告書を通して知った日本人キリスト者に感銘を与え、数週間にわたって全国の教会における祈祷の主題となった²⁴。

この会議では自給伝道の他、諸宗教のキリスト教への影響、キリスト教教育、医療伝道などについて部会ごとに協議された。ラッセル女史は宣教師として出席し、「女子教育部」における討議の席で活水開校後3年余の実態とその成果を丁寧な報告している²⁵。この会議の参加者たちは、会議の成果を興奮と共に各地に電報や手紙で伝えた²⁶。その結果、リバイバルの機運は一挙に全国に広がったのである。会議に参加していたラッセル女史もその雰囲気を一早く伝えたはずである。

第二回宣教師会議の熱気は5月に東京で開催された「第三回全国基督者信徒大親睦会」に吹き込まれた。その開催直前、日本組合基督教会の小崎弘道牧師は「ペンテコステの出来事が、東京においても実現されようとしている … とりわけ、われわれの教派とメソジスト派教会とは恵みを受けている … われわれは今週続けて、毎晩、祈禱会を開いてきている…」²⁷と、大親睦会開催への期待をペンテコステの出来事と結びつけてとらえていた。また、1883年リバイバルが組合教会とメソジスト教会を軸に生起したことを伺うことができる。

「第三回全国基督者信徒大親睦会」は、新栄町教会（現日本基督教団新栄教会）教会堂を主会場として5月8日から12日まで5日間の会期で開催された。全国から召集された代議員32名の名簿には、海老名弾正（安中）、新島襄（西京）、押川方義（仙台）、津田仙（東京）、植村正久（東京）、小崎弘道（東京）、井深梶之助（東京）、内村鑑三（札幌）等、当時のキリスト教界を代表する錚々たる面々が名を連ねた。その他、全国各地から参加した傍聴者は百余名に上った。4月の宣教師会議の流れを受けて議論は過熱したが、議長の小崎弘道（大阪）は興奮状態にある議場を見事に収束させた。後に海老名は、小崎は議長として適任であったと感想を残している²⁸。さて、会期3日目の5月10日、浅草教会会堂において木村熊二（東京）が「歐米の信徒は、我が國に道を傳えんが爲に、皆多少の金を損ぜり。然るに其の結果を聞くは、十中一に過ぎず。依って委員を置き、年三回其實況を報道すべし」と発言したことで議場は紛糾した²⁹。前月の宣教師会議で焦点となったミッションボードによる資金援

助をめぐる議論が、信徒大親睦会に引き継がれたことがわかる。

正式会期終了後の14日から19日まで、教会堂または劇場で大演説会が開かれた。いずれの会場も立錫の余地なく、聴衆に与えた感動も前例をみない程であったという。とりわけ18日から19日、明治座の前身である久松座における大説教会は、説教者と聴衆が混然一体となった「信仰的昂揚」に包まれた。18日は奥野昌綱（東京）による祈りで開会し、津田が開会の趣旨を述べた後、各代議員が演壇に立った。中でも小崎による「聖霊の感化」と題された説教は、普段は低い声であったため少数の会衆を前にした時でさえ聞き取りにくいほどだったというが、久松座とその周辺に集まった四千人以上（小崎の『七十年の回顧』による）の会衆にその説教がことごとく聞こえたばかりか、通りを隔てた向かい側の事務所にまで聞こえたので、その場に居あわせた津田が「奇蹟々々」と連呼してまわったというエピソードが残された程である。小崎は「此會合にて來會者一同に與へた信念は十年ならずして我國は基督教國となるであろうと云うことであつた」と、述懐している³⁰。

大説教会2日目の19日は久松座に三千人が押し寄せ、二階が落ちるおそれがあったので丸太で補強された。この日演壇に立ったひとり、山梨を拠点に活動していたメソジストの宣教師C.S.イービーは「今日は救わる日」と題する説教を行った³¹。その中で「天國はここに現在開けたと叫んだ時には、ほんとうに、天が開いたように感じ、一同驚いて天を仰いだ程であつた」等、その場の昂揚した雰囲気リアルに伝えられている³²。

この第三回全国基督者信徒大親睦会と続く大説教会の様子はただちに、出席者たちによって手紙や電報で母教会に伝えられた。その報告を受けた信徒たちは、それまでの祈祷会に加えて新たな祈祷会を開いた。O.ケーリは、このようなりバイバル状況について「多くのキリスト者にとってキリスト教の受け入れはその真理を知的に認める程度に留まっていた。しかるに今や、多くのキリスト者は、各人の罪についての真の意味がわかるようになったし、キリストを自分の救い主として受け入れることの意味もわかるようになり、他人の精神的な福祉を熱心に願うようになった（傍点筆者）」³³と、1883年リバイバルの特徴を的確に述べている。つまり、それまでの日本における福音受容が知的レベルに留まっていたが、リバイバルは罪の悔い改めを促し、更に他者の福祉に向かうという意味で体験及び実践レベルに到達したのである。

さて大親睦会が終わり、代議員たちはそれぞれの母教会へ帰ったが「彼らは全く新しい人に生まれ変わったように見えた。彼らは明らかに、上から、新鮮な光と、恩寵と、力を得たように見えた」という³⁴。

宣教師たちはこの年に生じたリバイバルを、各ボードに驚きと喜びをもって報告している。とりわけ注目したいのが、長崎で活動していたC.S.ロングによる報告である。

主は長崎で栄光を現す業をなさっている。聖霊は、宣教師たちのほか、日本人にも、すばらしい雨のように降り注がれた。これまでキリスト教を軽蔑してきた人たちも心から回心し、新しい宗教の正しさと力とを証言するようになった…このニュースが町中に広がったので、数百人もの人たちが教会に群れ集まるようになった…幾百人もの人たちが真の神に関する知識に導かれている有様は、さまざまな点で示されるに至っている。私は、このような衝撃的な出来事を、かつて本国でも見たことがなかった³⁵。

このロングの報告によって、長崎にもリバイバルの大きなうねりが到来したことがわかる。すなわち、1883年の2月バラの懺悔告白に端を発した横浜のリバイバルは、大阪での「第二回在日宣教師会議」に参加していたラッセル女史によって活水に伝えられ、更に東京で開かれた「第三回全国基督者信徒大親睦会」によって増幅されて長崎にまで及んだのである。

このような経緯から、1883年リバイバルの特徴がいくつか見えてくる。まず、このリバイバルの発端は、バラの夢をきっかけとする「祈祷会」だった。それが2つの会議を通して神学的に深められた結果、信仰の深化を伴って全国に波及した。リバイバルは「祈祷会」や教会会議などの集団に

よって共有された。また、「第二回在日宣教師会議」で提起され「第三回全国基督者信徒大親睦会」に引き継がれた自給伝道論の影響も小さくない。自給伝道論は、外国の資金援助によって構造的に生じた従属関係の解消を意識させ、結果的に日本人の信仰における「自主性」を覚醒させた。これによって教会の構造が根底から揺さぶられ、1883年リバイバルが誘導されたのである。大濱徹也は「一般的な福音伝達は牧師から教会役員を介して中心メンバーへ、そして一般教会員へというルートをとる。しかし、リバイバルはむしろ一般信徒や婦人を中心に展開した点で非日常的行為といえる（傍点筆者）」と説明している³⁶。また、バラから洗礼を受けて高崎教会や両国教会の牧師を歴任した星野光多は『信仰の復興』の中で、「凡て此度の感動は牧師教士のごときものゝ、位置より非ずして反って小さき一書生かよわき少女に始まりて一般の信徒に及ぼしたり、今も尙人に悔改をあたへ人を救いに導くものは會中の信者にして、會を理め牧する人にあらず堂々たる紳士の家に到りて勸誨をなす者は信者の尊重たる人にあらずして、下き處の信徒或は婦人なり、尊重たる信者牧師教士は其熱心に動かされ、其勞働に倣ひて次第に進み出るの有様なり余今この實際に遇て馬太傳十一章廿五節同廿一章十六節コリント前書一章廿七廿八節などの眞意を知れり云々（傍点筆者）」と報告している³⁷。実際のリバイバルには、弱く小さき者、つまり教会の周辺及び底辺から次第に教会全体に及ぶという特徴がみられた。

また、それまでの日本における福音受容は相対的にみて知的傾向が強かったが、このリバイバルは罪の悔い改めを促し、他者の福祉を志向した。つまり、福音を理解するだけでなく悔い改めることによって救いの体験となったのである。リバイバルの発火点となったバラは、その夢によって宣教師としての使命を再認識して懺悔した。これが導火線となって次々に祈りと悔い改めが連鎖し、ついに全国的なリバイバルとなった。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」(使徒言行録2:38)。このみ言葉は、この年現実のものとなった。

以上の「祈祷会」「聖霊の働き」「信仰的昂揚」「キリストによる一致」「自主性」「周辺性・底辺性」「体験・実践」という各要素は、いずれも独立したものでなく、相互に通底し混然一体となって発現した。これが1883年リバイバルの特徴といえる。これらの特徴はいずれも活水最初のリバイバルに相続された。そこで、次に活水における最初のリバイバルの発端を開いた大島サキについて言及したい。

2. 大島サキ

活水の第1回卒業生は神学科の5名である。大島サキはその内のひとりだが、興味深いことに関係した学校や教会によって名前の表記の仕方が異なる。活水では「大島サキ」と表記されることが多いが、『活水五十年史』では「大島サキ子女史」とも表記されている。また、ラッセル、ギール両女史は親しみを込めて「おサキさん」と呼んだ³⁸。

一方姉妹校の福岡女学院では、『福岡女学院七十五年史』(1961年)までは「大島サキ」と表記されていたが、『福岡女学院百年史』(1987年)からは「瑳琪」と漢字で記されている。これは、福岡女学院の創設にかかわり初代理事長となった谷川素雅纂の「福岡美以美教会史 一」、いわゆる谷川日記によるものであり、同資料が福岡女学院に伝えられたことによる変更と思われる³⁹。「福岡美以美教会史 一」が福岡女学院に伝えられた消息については、当時、福岡女学院短期大学学長の任にあり、福岡美以美教会の流れをくむ日本基督教団福岡中部教会の百年史編纂の執筆委員長でもあった木梨謙吉が、「メソジスト福岡教会設立課程とC・Sロング」の中で解説している⁴⁰。

なお、谷川日記には「上森瑳琪」と記名された箇所が2か所ある⁴¹。谷川が教会の同労者として数年とはいえ伝道活動を共にした大島の姓を間違えたとは思えないし、「瑳琪」という同名の女性が1つの教会の同時期に2人存在したとも考えにくい。さらに、大島と共に活水最初の卒業生となった井上政(マサ)の前後にその名が記されていることから、大島瑳琪であることはほぼ間違いない。

つまり、大島は旧姓上森だった可能性がある。

また、長年所属した日本メソジスト熊本教会（現日本基督教団熊本白川教会 - 以下熊本教会と略記）の『熊本白川教会百年史』では「大島咲子」と表記されている。『福岡中部教会百年史』では基本的に「大島サキ」、谷川素雅が記したいわゆる谷川日記の引用箇所では「大島瑳琪」と表記している。以上のように大島サキの名は多様に表記されているところに特徴があるが、これは大島及びその働きの多面性を象徴しているようで興味深い。なお、本稿は活水リバイバルがテーマなので、活水の記念誌を踏襲して「大島サキ」とする。

大島は自身の出自や活水に関わる以前の生活について固く口を閉ざしていたので、7年間在籍した活水にも、28年間仕えた熊本教会にも、文章記録はもとより関係者の伝承としてもほとんど記録が残されていない。かろうじて、Ⅲ.The Bible Woman's Training Department, in *KWASSUI JO GAKKO-1879~1929-*,⁴²と、LETTER FROM MISS GHEER, in *Heathen Woman's Friend*,⁴³に、わずかな手がかりを見出すのみである。

それらによれば、大島が活水に関わるようになったのは、活水創設から2年目の1881年、生徒の機織の指導と幼い生徒たちの世話をしてくれる人材を求めたことによる。その折、士族出身で30代の大島が推薦されてきた⁴⁴。

当時、長崎では武家の女性が機織の技術をもっていたという例はみあたらない。ただ、長崎と縁が深い佐賀（鍋島）藩には機織の伝統が現存する。ひとつは佐賀錦（あるいは鹿島錦）である。佐賀錦は佐賀藩の本支藩を問わず御殿女中のたしなみとして普及していた。もうひとつは鍋島緞通である。鍋島緞通については、佐賀藩主みずから農民に緞通作りを奨励し、藩に交易を統轄するための役職を置くほど力を入れていた。ただ鍋島緞通の場合、織機が大掛かりであることと、武家が織手となった形跡が確認できないことから、大島がその技術をもっていた蓋然性は低い。一方の佐賀錦であれば、士族出身の大島がその技術をもっていたとしても不自然ではない。しかも佐賀錦には卓上の織機で済むため、生徒の教育用には適していた。しかし、これを裏付ける資料はない。

ところで、大島に結婚歴があったことは確かである。現在確認されている大島が写った最古の写真は、神学科の学生としてギール女史と創設にかかわった福岡英和女学校（現福岡女学院）創設直後、おそらく1885年頃のものである。髪型は既婚女性を示す丸髷、しかも引眉であることから出産経験の可能性も否定できない。



神学科在籍時（1885年頃）

夫についての手がかりはほとんどないが、わずかな記録をたどれば、士族であったことや酒飲みで裕福でなかったこと、大島サキが活水に雇われた時点では生存していたことがわかっている。夫が生存しているにもかかわらず大島サキが夫と別に暮らしていたとすれば、当時の社会的通念を勘案すると、かなり切迫した事情があったと考えざるを得ない。推測をゆるしていただければ、何らかの理由によって夫と離別し、自活の必要が生じたため、活水に職を求めたという経緯が考えられる。ギール女史の報告によれば、初めて大島と会った際、大島の全財産はみすぼらしい1、2着の着物のみで、寝具さえも所有していなかった。かなり困窮した状況だったことは確かである⁴⁵。

大島は1881年に活水に入って以来、聖書研究会に熱心に参加し、主にギール女史の薫陶を受けた。そして2年後の1883年5月、祈祷週間の後に活水最初のリバイバルが起ったが、大島はその中心人物として最初に信仰を告白している。既述したように、1883年リバイバルは教会及びその周辺において、むしろ弱い立場にある人々を主体に生起したが、この特徴は活水最初のリバイバルにおいても顕著だった。

リバイバルで回心した後、大島はそれを契機に創設された婦人伝道者養成組（後の神学科）で本格的に聖書を学ぶようになった。婦人伝道者養成組の生徒には、学業と市内の日曜学校や婦人の集会

における福音奉仕活動を両立させることが要請された。神学の学びとしては、ビネーの『神学』、ラッセル女史が著した『舊約史略』を教科書とした旧約聖書の歴史、米国長老派の宣教師ウィリアム・アレクサンダー（丁題良）著の教義入門書である『天道遡源』の3科目について、教師につかず自分たちで勉強した⁴⁶。

活水同様、J.C.デビソンの働きかけで創設された男子校カブリー・セミナリーの初代校長となったC.S.ロングは、デビソンの役割を引き継いだ。そして手始めに、福岡に教会と学校を設立することを計画し、鹿児島教会に谷川素雅伝道師を訪ねて協力を要請した。谷川はそれに応えて福岡に拠点を移した。谷川日記には、1884年10月31日に「福岡呉服町八番地及浜町十三番地ヲ借り得タリ呉服町を仮会堂とし浜町ヲ英学校トサダム」とある。2日後の11月2日「安息日ナルヲ以テ午前ハ浜町ニ集会シ上帝ヲ讃シ祈禱奉シ教師ハ福田氏ニ洗礼ヲ施シメ是日来会スルモノハ福田陣野ノ二氏ナリシロング氏ハ戸外ノ群衆ニ望ミヲ属スル旨ヲ演ヘ谷川氏ハ宗教ノ必要ナルヲ伝エタリ」⁴⁷。これが福岡美以美教会（現日本基督教団福岡中部教会）における最初の礼拝である⁴⁸。『福岡中部教会百年史』の年表には、その年の主任教師は谷川素雅、宣教師はロングとデビソン、そして担任教師には活水神学科生徒の井上マサ、大島サキ、高森トリが名を連ねた。ちなみに大島は、卒業の前年まで担任教師の任にあった。

ロングは福岡美以美教会における最初の礼拝を終えて1884年11月4日博多港より長崎に帰り、谷川はその後を追って同月10日陸路長崎に赴いた。福岡の伝道が日ごとに進み、子女の教育についての要望が信徒から望まれたので長崎の婦人宣教会の宣教師に女子教育のための学校創設の協力を打診するためである。長崎の婦人宣教会から入学希望者が50名以上あれば協力するという回答を得た谷川は、ただちに福岡に戻り生徒募集を始めたところ54名の応募があったので、早速、学校創設にむけて婦人伝道会に実地視察を要請している。

それを受けてギール女史は、翌1885年4月22日大島サキを伴って福岡入りし、6日間滞在して実地見聞を行った。その後一時長崎に戻ったが、5月28日大島を再度伴い、デビソンと共に長崎から乗船し博多津に上陸した⁴⁹。この時すでに福岡で女子教育を始める決意を固めていたギール女史は、大島と共に開学に必要な諸準備を整え、6月25日、谷川を初代校長として呉服町八番地に英和女学校（現在の福岡女学院）を仮設したのである⁵⁰。

福岡における大島の活動はあまり記録されていないが、『福岡女学校五十年史』には、開学当時の様子を伝えた第三回卒業生木下まさによる「恩師を憶ふ ギール先生についての思出」が収められており、ギール女史への思い出と共にわずかに大島への言及がみられる。

丁度私が七才の春だったと思う。一日私の家のささやかな玄関に二台の人力車が着いた。車上の人はその頃では珍しい西洋の断髪婦人と日本婦人とであった。近所の子供等は『アレ、異人が異人が』と言って騒ぎ立てた。瞬く間に門前には人の黒山を築いた。暫時父と何事か談話されていたようであったが、間もなく再び車上の人となられて姿は消えてしまった。後より聞けば近所ではかの異人は何の為に来たのだらうと噂とりどりであったそうである。この二人の乗客こそは福岡英和女学校の創立者ギール先生と先生を助けていられた大島咲子夫人であった。それから数日経って、私は父に連れられて因幡町の学校へ入学することになった。私が入学した頃までは寄宿生とっては唯私一人でそれはそれは寂しいことであった。勿論大人では大島夫人と井上まさ子姉(加藤敬三氏夫人)もいられた…加藤夫人は私の着物や襦袢などの洗濯から食事万端の世話をして下さいました…先生は大島夫人とあちらこちら訪問された。大島夫人が訪問から歸らると袂からお土産のお菓子包を取りだして下さいました。幼い私にはそれが何よりの楽しみであった⁵¹。

『福岡女学院百年史』は、ギール女史の右腕として開学の際に大きな功績を残した大島を「大島瑳瑤」という小見出しを立てて次のように紹介している。

一八八一年（明14）年、元武士の妻であったが、保母の手伝いとして活水女学校に雇用され、まもなく神学科生徒と

なり、生徒の中より最初に信仰に入り、バイブルウーマン（婦人宣教師）として、ギールの誠実な友であり、有能な助手となり、婦人の諸活動では、ギールの右腕として信頼されていた。活水女学校神学科の第一回神学生となり、英和女学校創設にあたっては、協力者として、日本メソジスト福岡教会では婦人伝道師として働いた。（一八八四―一八八七）

その後日本メソジスト熊本教会に着任、婦人伝道師として、教会の母と慕われて、二十八年の長期間にわたり活動、一九一七年（大6）年十一月二十八日永眠した⁵²。

神学科を卒業した1888年、大島はすでに43才になっていた。翌1889年に熊本教会の婦人伝道師として赴任し、以後1917年まで28年在籍している。また、教会を足掛かりに慈善活動を含む様々な社会活動に従事した。そのひとつが紫苑会における働きである。紫苑会は熊本市内の7つのキリスト教婦人会の連合によって始められた社会事業で、貧しい人達のための無料診療所（1908年7月開設）や保育事業などを行った。当時無料診療所で診察にあたった福田令寿は、次のような文章を残している。「大正元年に初めて原敬



神学科第1回卒業生5名
（左から柴田ハル、大島サキ、井上マサ、川久保トク、岡島ハツネ）

内務大臣から助成金をいただきましたが、それが百五十円、僅かなものでしたよ。経営は非常に苦しくて、婦人会を導いていた大島咲子さんなど熱心な婦人会員たちが、毎月五銭、十銭という零細な寄付金を集めて回られよりました。大島さんはほんとうに感心な信徒でした」⁵³。

紫苑会は、熊本洋学校跡近くの古城町5番地に活動拠点として二階建ての紫苑会館を所有していた。佐藤有美の『熊本バンドに続くもの』に無料診療所の様子が次のように紹介されている。「診療所風に建てられており、玄関の横が兼薬局、下足を脱いで上がると畳敷きの待合室、次の部屋が板張りの診療室になっていた」⁵⁴。長年重要な役割を担った紫苑会は時代の変化と共にその役割を終え、その活動は複数の団体に継承された。活動拠点となった紫苑会館の二階は連合婦人会の集会室として引き続き使用されたが、一階は1949年7月12日熊本YMCAに事務所として貸与された。ちなみに一階の集会室では、戦災で会堂を焼失した草葉町教会（現日本基督教団熊本草葉町教会）の主日礼拝がしばらく守られたこともある⁵⁵。やがて1953年6月26日の熊本大水害で大きな被害を受けたことを契機に熊本YMCAに寄付されている⁵⁶。現在は熊本YMCAビル一階の「紫苑会室」がその名残を留めるのみである。

紫苑会による保育事業については、キリスト教の背景を共有する社会福祉法人神召会に引き継がれ、シオン保育園として現在にいたっている。その経緯について社会福祉法人神召会のホームページに次のような説明がある。「本園の建物は、当初、熊本キリスト教婦人連合会が施療事業を行うために明治41（1908）年に設立したシオン（紫苑）会によって昭和46（1971）年に建設されました。終戦後、社会事情が変化したためシオン会は施療事業を廃止し、昭和23（1948）年に熊本YMCAが同団体の会館として使用を開始しましたが（熊本YMCAは1948年8月1日に坪井立町16番地の九州物産K・Kの一室に創立事務所を置いている。事務所が紫苑会館に移転したのは1949年7月―著者注）、昭和40（1965）年に青少年センターの新設に伴い移転しました。そこで、キリスト教婦人団体シオン会が社会福祉活動を通じて社会に貢献した歴史的功績を記念し、新たに改造増築し、昭和41（1966）年4月1日に「シオン」の名を受け継いで乳児保育を中心とする社会福祉事業を開始したのがシオン保育園の始まりです」⁵⁷。

さて、大島と慈善事業との関わりという点では「活水女園」が最も深い。ラッセル女史は1893年

大江九品寺にある熊本教会の敷地内に「活水女園」（熊本教会では「白水女学校」あるいは「白水女苑」としている）を創設し、大島はこの事業に協力したとある⁵⁸。『活水五十年史』には、その起源を「明治廿六年（一八九三）島原灣海嘯の際熊本側の沿岸で多数の孤兒が寄るべなき運命を嘆いて居ることを耳にした時、女史はどうしても座視するに忍びなかつた。直に進み出て十五名の無告の女兒を引受けた、是が「活水女園」の起りである⁵⁹と説明している。また『活水学院百年史』には「一八九三（明治二六）年島原地震の際、津波に襲われた熊本側の沿岸で多数の孤兒が路頭に迷っているのを聞いた女史は見すごしにすることができなかつた。直ちに進み出て一五名の無縁の女兒を引き受けた。収容施設は熊本に設けられた。これが活水女園の起りである。」⁶⁰と、五十年史の記述をそのまま踏襲している。

やがて「活水女園」は枝分かれして、当初の児童養護施設としては1898年に福岡市郊外の古賀村に移転し、一方は熊本教会の附属園「王栄幼稚園」として1924年熊本県より正式に認可されて現在に至っている。「王栄幼稚園」のホームページには「明治26年、長崎の活水女学院の創立者であられるエリザベート・ラッセル先生は、島原大地震の時、津波に襲われた熊本側沿岸で、多数の子どもたちが路頭に迷っている事情を見て、収容施設として大江九品寺に『白水女苑』を設立されました。」と、その起源を「活水女園」としている⁶¹。いずれも「活水女園」の創設を島原地震と関連づけており、「島原大変肥後迷惑」をその端緒としている。「島原大変肥後迷惑」は、島原地方を震源とする大地震及び眉山崩壊の岩屑なだれに起因する津波が対岸の熊本を襲い、死者は島原側で約10,000名、熊本側で約5,000名、計15,000名という大災害だった。しかしその大災害は1792年5月の出来事であり、活水女園創設のほぼ百年前であることから直接の因果関係は考えにくい。また「島原大変肥後迷惑」の後、島原を震源とする大きな地震は1922年の島原（千々石湾）地震（M6.9）まで発生していない。したがって、「活水女園」創設と地震との因果関係を求めるとすれば、むしろ1893年前後に発生した別の地震を考える必要がある。例えば、1889年7月熊本地方を震源とするM6.3の直下型の熊本地震（金峰山南東麓附近を震源としたことから金峰山地震とも称される）がある。ところが、これによる被害は比較的軽微で、熊本市とその周辺に被害が発生したものの死者20名、しかも島原湾における海嘯及び津波を伴っていない。そこで、発生地域や津波という条件に拘泥しなければ、「活水女園」創設2年前に起きた明治期最大の地震である濃尾地震の可能性が浮上する。濃尾地震は1891年10月28日濃尾地方を震源に発生したM8.0最大震度7の内陸地殻内地震で、被害は岐阜県と愛知県にわたり、死者・行方不明者を含めて7,273名に及ぶ大地震災害である。

実は、大島はこの濃尾地震と深く関わっていた。その消息について『活水同窓会の歩み』は、1892年に発行された『女学雑誌』第304号に掲載された長崎通信の記事を引用して以下のように紹介している。

大島咲子、井上政子右両氏は震災地負傷者の惨苦を傍観するに忍びず、昨年十一月十六日九州を發して該地に赴き看護に尽力し居たりしが、去る一月廿三日当地活水女学校迄歸り來られたり。両氏は市の枝に十日間、一の宮に四十二日間滞在して、熱心に看護せられしが、其懇切にして活潑なる働きには孰れも感心せざるなく、該地出發の時などは、患者は袖にすがりて離別を惜しみしと言ふ。両県庁よりは特に賞品若しくは賞状を附与して其功を賞せられし由、又該地より八才の一少女を携へ來りて活水女学校に教育方を依頼されたり。此少女は下腹部に大傷を蒙り、其上半身泥砂に埋り居る所を、他人に救上げられ、後両氏等の看護によりて全癒に至りしもの由なるが、後々には賤業に陥らしめらるゝの恐ありしを憂て、兩親納得の上遂に此地に連れ歸られしなりと言ふ。（因に記す大島氏は熊本メソジスト教会、井上氏は柳川メソジスト教会在住の婦人伝道者にして、共に熱心伝道に従事し居らる）⁶²

大島サキ（咲子）と井上マサ（政子）は共に神学科の第1回卒業生である。大島は卒業後熊本メソジスト教会の婦人伝道師となり、井上は福岡英和女学校で聖書を教えた。両名は神学科在籍中、共に英和女学校開設に尽力した仲であり、1884年には福岡美以美教会で両名とも担任教師になってい

る。その緊密な関係から推測すれば、活水卒業後も何らかの形で連絡を取りあっていたとしても不自然ではない。その結果、卒業3年後に起きた濃尾地震の際に協力して救援に向かったと考えられる。なお、『熊本白川教会百年史』には、「1891年11月濃尾地震の負傷者看護のため大島咲子が出向した」とあるので、大島は教会の派遣によって濃尾地震救援に携わったことがわかる⁶³。

また、『女学雑誌』記事中にある「…又該地より八才の一少女を携へ来りて活水女学校に教育方を依頼されたり…」という箇所注目したい。記事では一少女となっているが、『活水同窓会の歩み』には「…長野地震の時（濃尾地震と混同した可能性がある－筆者注）大島サキと井上マサに連れられて来た三浦角、上田ヨネ…」と、2名の女子の名が記されている⁶⁴。いずれにしても、大島と井上は地震被災地から少女を活水に連れ帰ったことは事実である。これを契機に「活水女園」が開設されたとすれば、「多数の孤児が寄るべなき運命を嘆いて居ることを耳にした時、女史はどうしても座視するに忍びなかつた。直に進み出て十五名の無告の女兒を引受けた」という『活水五十年史』の記述とも概ね一致する。また地震から「活水女園」創設に至る経緯や年代的にも無理がない。そこで本稿では、大島と井上による濃尾地震救援活動がラッセル女史を揺り動かし、それが1893年の「活水女園」創設に繋がったと解釈したい。

ところで、大島らによる濃尾地震救援活動は、日本赤十字社と何らかの関わりがあった可能性がある。『活水同窓会の歩み』には、「その後、大島サキは熊本に定住して三年坂教会（現日本基督教団熊本白川教会－筆者注）のために尽力する一方、孤児たちの世話をしたり、日本赤十字社の支社長として奉仕し、その労は勲章をもってねぎらわれている」と記されている⁶⁵。

しかし実際には、1877年博愛社として創設され、1887年に改称した日本赤十字社（以下日赤と略記）



熊本教会婦人伝道師時代

支社長の名簿に大島の名はない。大島が熊本教会に婦人伝道師として赴任した1889年から1917年に死去するまでの期間を調べてみると、初代佐野常民（1887年5月24日～1902年12月7日まで就任）から第4代支社長の石黒忠恵（1917年2月21日～1920年9月4日就任）まで全員が政府の重鎮で爵位をもった人物が占めている。同誌に大島の大正時代の写真が掲載されており、それには「赤十字功労者表彰の大島サキ」という説明がある。ところが、大島がつけている徽章は中心円形の中に鳳凰、桐、竹、十字架が表された日本赤十字社の社員章にほかならない。日赤社員章の桐竹鳳凰と十字の組み合わせは、日本赤十字社の紋章とも一致する⁶⁶。したがって、この徽章により大島が日赤社員だったことは明らかだが、日赤支社長という記述は事実誤認と思われる。ちなみに博愛社が1879年に定めた規則によれば、社員資格は年釀金3円以上12円以下の者、1881年には要件を拡大して労働奉仕者も含めるようになっている⁶⁷。

また大島がつけている日赤社員章の右側に、特別愛国婦人会会員章が見える。愛国婦人会は1900年の北清事変を契機として結成された。戦火拡大につれて多くの戦傷病者が出た折、日赤熊本支部からも医員、看護婦長、看護人あわせて5名の救護員を現地に派遣したが、この事態に直面した佐賀県の奥村五百子によって結成された団体である。熊本県では1901年6月1日に愛国婦人会熊本支部が結成され、初代支部長として当時の日赤熊本支部長（県知事）夫人徳久張子が就任している。愛国婦人会の目的や活動内容が日赤事業と共通する点が多いため、愛国婦人会熊本支部は創設後まも



日赤社員章（表）



日赤社員章（裏）



特別愛国婦人会会員章

なく日赤熊本支部の一室を借りて事務所に当て、日赤熊本支部と行動を共にした⁶⁸。総裁及び名誉会長は皇族、会長及び役員は華族や名流婦人によって構成されているのが特徴である。上流婦人中心の団体に、市井の大島がどのような関係で加入したのかを示す資料は見当たらないが、その一員であったことは写真の会員章で間違いない。

また、日赤熊本支部の外郭団体に篤志婦人会がある。その結成は愛国婦人会より早く1887年まで遡る。篤志婦人会は日赤初代総裁有栖川宮熾仁親王妃の強い要請によって結成されたもので、看護法を習得し、各家庭及び社会の健康増進、戦時災害時においては婦人のつとめとして患者の苦痛軽減に役立てる。また、看護の業務は身分地位の低い人の仕事として軽視されていたが、その弊害を打破し、看護の尊さを知り、併せてわが国婦女子の美風を要請助長することなどを目的に掲げて創設された⁶⁹。篤志婦人会規約第2条には、「本會は日本赤十字社ノ監督余ヲ受クルモノトス」とあり、日赤の活動を補助する役割が確認されている。日赤熊本支部篤志婦人会は1894年8月15日に結成され、日赤熊本支部と連携を保ちつつ活動を開始している⁷⁰。愛国婦人会と篤志婦人会は共に日赤熊本支部と密接な関係にあった。「愛国婦人会が日赤熊本支部に移転後まもなく日露戦争が勃発したが、愛国婦人会の代表は日赤熊本支部に召集された救護員に激励のことばを贈るとともに、篤志婦人会と共に、出発の為の諸準備に協力した」⁷¹。

日赤は濃尾地震に先立つ3年前の1888年、磐梯山噴火救援のため軍医3名を派遣したことを契機に、それまでの戦時救護のみの方針を変更して平時救援を開始していた。1890年和歌山県串本町沖で遭難したトルコ軍艦エルトゥール号救援に医員1名と看護婦2名を派遣。そして1881年10月28日に発生した濃尾地震救援である。磐梯山噴火救援以来の経緯を受けて、まだ社則に謳われていなかったが（天災救護規則が整備されたのは1892年）、救援要請に応える下地は社内すでに形成されていた。日赤本社は名古屋支部から救護員派遣を要請する電報を受信すると、ただちに救護員を派遣した。本社は同29日、医員2名と看護婦4名を愛知県に、30日に医員3名と看護婦6名を岐阜県にそれぞれ派遣し、その後増員されて救護員は計56名にのぼった⁷²。被災地は愛知県と岐阜県両県をまたいで広範囲にわたっていた。『女学雑誌』が報告しているように、大島と井上は市の枝に10日、一の宮に42日の計52日間被災救護にあたったので、現地で日赤の救護員と連携して活動した可能性は充分考えられる。推測の域だが、大島は濃尾地震救援の実績が認められて日赤社員章が授与され、その後愛国婦人会の一員に加えられたのではないだろうか。

ところで、大島が活躍した紫苑会の拠点である紫苑会館は、熊本洋学校教師館（ジェーンズ邸）に近い古城町5番地にあった。熊本洋学校は1876年廃校となっているが、佐野常民が1877年5月3日、日赤の前身である博愛社設立の許可を有栖川宮熾仁親王から受けた特別な建物である。その頃、長崎で活動していた宣教師たちは、熊本や鹿児島でも相互に援助しながら宣教を進めていた。C.M.ウィリアムズとJ.リギンズは聖公会、G.H.F.フルベッキとH.スタウトは長老教会、J.C.デビソンはメソジスト教会とそれぞれ教派は異なるが連携して活動することが多かった。また平信徒だが熊本洋学校教師のL.L.ジェーンズとも協力関係にあった。大島は熊本教会をたびたび訪問したメソジスト長崎巡廻師のデビソンや後任のI.H.コレル及び他教派の宣教師等を通して、アンリ・デュナンがキリスト教を背景に1863年創始した赤十字について何らかの情報を得、1876年の熊本洋学校教師館における博愛社設立に興味をもった可能性がある。しかし、大島が濃尾地震救援に赴いたのは1891年であり、熊本篤志婦人会や愛国婦人会の結成前なのでそれらの団体との関係はない。だが、紫苑会の活動を介して日赤や愛国婦人会等との関わりを次第に深めるようになった経緯は納得できる。

やがて紫苑会の活動の一部は熊本YMCAに引き継がれた。じつはアンリ・デュナンは、赤十字創始以前すでにYMCAと関わっていた。1844年ロンドンで誕生したYMCAは、瞬く間に若者の心を捉えて活動を広げた。カルヴァン派の熱心な信仰に立つデュナンは、1855年、呼びかけ人としてパリで最初の世界YMCA大会を開いた。その大会には8カ国38のYMCAから99名の青年が集まり、その結果、世界YMCA同盟が結成されている。つまり、デュナンは赤十字の創始者であると共に

世界YMCA同盟の生みの親でもあった。

さて、1889年8月、大島は熊本教会に婦人伝道師として赴任した。大島が着任したことで、教会はとだえていた講義所を再開し教勢は高まった。大島について『熊本白川教会百年史』は、同五十年記念誌を引用して次のように紹介している。「この教会のある限り忘れることの出来ない人で、明治二二年明星のようにあらわれ、大正六年一月二八日熊本で召天するまで教会の中心にあり、信仰深く、忠実・謙遜で忍耐づよい人柄で人々の信頼をあつめ、その感化の大きさは牧師以上のものがあり、この人によって多くの信者が育てられ教会の母とよばれた。また紫苑会の中心人物として教会の外でもよく知られている。教会の今日あるはこの人の力である。」⁷³と、大島に最大級の賛辞を贈っている。

大島が教会に着任した翌年にあたる1890年10月30日「教育勅語」が發布された。これによって天皇至上主義に反するという理由でキリスト教に対する全国規模の迫害が起った。教育界では内村鑑三の不敬事件が有名だが、熊本でも熊本英学校におけるキリスト者教諭の免職事件、山鹿高等小学校児童退学事件、八代小学校児童退学事件など、事件が頻発した。この流れに新聞が同調したので、キリスト教に近づくのは危険だという空気が蔓延した。熊本教会の信者一同は涙をのみ、忍耐し自重して、ただ聖霊のみちびきをのみを祈りつづけた。その結果、熊本教会では迫害の嵐の中にあつて信者が減少しなかったばかりか、むしろ増加に転じている。「栗村牧師が信徒を励まし、婦人伝道師大島咲子の熱心な伝道により信徒の信仰は強められ燃え上った。祈祷会が盛んになり、特に連合祈祷会が盛んに開かれて、出席者が多いため、遅れたものは入室できない有様となった」⁷⁴。四面楚歌ともいえるキリスト教迫害の状況下で、信徒が聖霊の導きを祈り求め続けたことによって信仰が燃え上がり、祈祷会が迫害を跳ね返す原動力となったのである。この渦中で大島の婦人伝道師としての働きは際立った。

1892年を迎えると、熊本教会の祈祷会はますます熱を帯びた。『熊本白川教会百年史』には「三月二八日からは毎夜続けて祈祷会を開き、聖霊の下ることを祈った。一同は導かれるままに或いは涙を流して罪を告白、或いは喜びと感謝をあらわした。祈りも感話も、いつもに見られない感動的なもので『愚なる如く狂するが如く』外部の人が見たら異様に思われる程であったという。受洗を申し出る人もあった。聖霊のみちびきの中に、一同の心は一つとなり信仰も高まり、祈祷会はいつの間にか六週間もの長い間続いた。このように盛んな祈祷会は教会創立以来はじめてのことであった…」⁷⁵。同年6月のメソジスト教会第九回日本年会記録の中に次のようなコレルの報告がある。「数カ月前から教会は活気を帯びてきて、今もなおリバイバルの勢いが止んでいない…私はまたこの報告書の中に大島咲子氏の働きについて少し述べたいと思う。この人はこの教会で熱心に働いたので、人々はこの人を心から信じ、その成果は少なくない」⁷⁶。コレルは熊本教会のリバイバルを報告するに際して、とりわけ大島の働きに注目していたことがわかる。熊本教会は、キリスト教に対する逆風の中で、大島を中心とするリバイバルが生起した。

時を同じくして活水に2回目のリバイバルが到来した。1892年3月、福岡美以美教会第3代大竹常業牧師は、九州美以美教会長崎連回会が鹿児島で開催されるので、その途上活水に立ち寄った。その際大竹は、活水で火のごとき聖霊に燃やされ、ついに鹿児島での会議参加を断念し、急遽福岡に帰った⁷⁷。このリバイバルについて『活水学院百年史』は、次のように解説している。「この年の一月岡部健太郎氏が米国留学から帰り、本校教師に就任すると霊的感化が生徒間に浸透していった。まだ若い生徒たちも靈感に触れて全く別人のようになった。街頭に進出して道行く人を引きとめて、『汝等聖霊を受けよ』と叫ぶまでに至った」⁷⁸。熊本教会のリバイバルと活水における2回目のリバイバルが生起した背景は異なる。しかし、相互に何らかの連関があった可能性は否定できない。

ところで、1892年の6月熊本教会の雑書委員となった2人の中に田添鉄二の名がある。熊本英学校を経て長崎の鎮西学院を卒業した後シカゴ大学に留学した人物である。帰国後は長崎で新聞社の

主筆をつとめた後、上京して日本社会党の設立に参加して評議員となった。その妹である田添テルは、熊本県立第一高女から活水音楽師範科に進み、卒業時に最初の「魂譲り」(卒業生の願いが込められた二色のリボンを結んだ手桶が、卒業生から在校生へ譲り渡される儀式)を行っている。テルは活水卒業後、尚綱女学校に勤務するかたわら熊本教会のオルガニストとして奉仕した。後にその両親も受洗しているが、田添一家の受洗にいたる背景に大島の果たした役割が大きかったことが報告されている⁷⁹。

ときに1899年12月1日、活水は創立20周年を迎えた。その節目にあたり、来賓を迎えての記念式に大島はギール女史と共に出席している。『活水五十年史』には「午前六時講堂に於て神學部主任教師メルトン女史司會の下に祈禱會が開かれた、午前十時からはヤング校長の司會で談話會が催された、折柄來崎中之ギール女史及大島サキ子女史の懷舊談に本校の昔語りを目の當り見る心地して、一同感興に充ちて散會した」と、その様子が伝えられている⁸⁰。

1910年頃、熊本教会に市内で耳鼻科医院を開業していた加地八郎が通い始めた。加地はその後教会の代表的な信徒になり、教会創立七十周年にあたって当時の思い出を書き残した。その中で「貧しい結核患者の咯血している薄暗い部屋で甲斐甲斐しく看護を続けている大島伝道師(通称おばあさん)の姿に神の愛を見た」と、大島への敬意をこめて記している⁸¹。この頃大島は62歳になっていたはずで、紫苑会が1908年に開いた無料診療所で活動していた時期と重なる。大島は無料診療所における奉仕ばかりでなく、重症患者宅を訪問しながら看護していたことが伺える貴重な証言である。

1915年、熊本教会の敷地内にラッセル女史の支援により待望の宣教師館が建てられた。以後歴代の婦人宣教師はここに住み、子供会、婦人会、バイブルクラス、青年会、隣接して創設された王榮幼稚園の母の会などが行われ、伝道活動の拠点となった。また、その10年前から大島がデビソン夫人を助けて週1回開いてきた婦人聖書研究会もこの宣教師館で行われるようになった。そして同じ年、大島の70歳の誕生日もこの新しい宣教師館で行われたのである⁸²。「その年、ラッセルの生涯の友であった、大島咲子の七〇歳の誕生日を迎えたと、宣教師活動の記録資料の中に記されているが、彼女が如何に信頼が厚かったかと想像される」⁸³。それから2年後の1917年11月28日、大島はその生涯を閉じた。



晩年の大島サキ

大島は波乱万丈の生涯をおくった。とりわけ活水に入ってキリスト教信仰に目覚めてからの歩みは怒涛のような激しさを伴っている。神学生時代すでにギール女史を助けて英和女学校創設のために奔走し、卒業後は熊本教会での婦人伝道師として働き、やがて教会の母とまで呼ばれるようになった。その他、紫苑会や日赤及び愛国婦人会での活動等々。大島の活発な諸活動はその深い信仰の発露に他ならない。そこで、大島がキリスト教信仰を受け入れた原点である活水最初のリバイバルについて言及したい。

3. 活水最初のリバイバル

活水が東山手13番に初めて自前の校舎を落成したのは1882年5月のことだった。したがって、その丁度1年後のリバイバルは、この校舎が舞台となった。翌1883年、ラッセル女史は「私たちは毎朝八時新約聖書の授業を持ち、また毎日旧約聖書を三組に教えています。ほかに週三回英語の進んだ生徒と共に英訳の聖書を読んでいます」と報告している⁸⁴。ギール女史は学校での聖書の授業に加えて、市内の日曜学校や市外の村々で集会を持ち、月曜の夜は一般婦人のためチャペルで集会を開いた⁸⁵。おそらく、同年4月の「第二回在日宣教師会議」や5月の「第三回全国基督者信徒大親睦会」の熱気が聖書の授業を活性化し、リバイバルの土壌を醸成したものと思われる。

年代はやや下るが1887年の学校規則の中に「生徒ノ居室ハ常ニ之ヲ清潔ニシ毎朝祈会ノ前洒掃スヘシ…」(学校規則の舎則第1項)という項目がある。つまり、毎朝掃除をしてから祈祷会がもたれていた。この時代、多くの生徒は寄宿舎生活であったことから、毎朝の祈祷会は生徒たちの霊的

成長に大きく寄与した。このほか、寄宿舎生は学外通学生にも規定されていたように土曜の夕刻の祈祷会にも参加し、日曜にはメソジスト出島教会に出席していた⁸⁶。このような聖書の学びや祈りや礼拝を中心とする営みがリバイバルを惹起する要因となったことは確かである。

さて、活水における最初のリバイバルは、いくつかの資料に記録されている。まず、『活水学院百年史』の記述を確認しておきたい。

一八八三（明治一六）年初週祈祷会が終りを告げようとする頃から祈祷の精神が校内に燃え上った。そして六〇名の生徒中、幼年のものを除いて他は皆神に立ちかえり、一時に四六名が洗礼をうけて教会に加入した。この動きが神学科の創始を促がしたばかりでなく学校の各部にもおよび、福音の奉仕は活発になり、寄宿舎の生徒を中心として市内の諸所に日曜学校を開き、また聖書に関する冊子を配布したりして伝道の熱は燃え上った。この状況をメソジスト教会の第七、第八年会では「宗教教育のめざましい成果」としている⁸⁷。

ラッセル女史が活水在職中に体験した事柄を記した日記がある。その1883年（滞日5年目）には5月のリバイバルが克明に記録されている。

5月の最初の日曜日、いつものようにクラス毎の祈りの会を持ちました。この集会は始めから持たれていたのですが、それまでは何という事もなかったのです。所が思いも掛けず、この日が記憶すべき日になりました。その日のリーダーはギア先生でした。先生はクラスの最年長の生徒に話しかけました。その生徒は未亡人で、婦人伝道者になる為の勉強をしていたのですが、まだ信仰を受け入れるまでには至っていませんでした。ギア先生は、おサキさん、今日はイエス様について何か良いお話をしていただけますか、と聞きました。おサキさんは立ち上がりました。私は彼女の前に座っていました。涙が彼女の頬を流れ落ちるのが見えました。唇は震えていました。いや、身体全体が震えていたのです。そして次のように話し始めました。昨夜、私はおトクさんと一緒に自分達の部屋にいました、その時私がこう言ったのです、神様の前に跪きましょ、そして先生が教えて下さったことが正しいかどうか、その答が与えられるまで祈りましょ、自分自身で信じる事ができるかどうか確認したいのです、と。そして二人で祈りました、11時半頃イエス様が応えて下さいました、それで先生のおっしゃるとおりだ、と知ったのです…生徒達は3、4人のひどく幼い子供は別にして、ほかは皆回心したのでした。38人の成年男女も外部から教会に出席するようになりました…日本に来て始めて経験した、最も幸せな年でした。学校の様子はすっかり変わりましたし、廻りの社会も同じように変わってしまったように、私には思えました⁸⁸。

これによってリバイバルの発端は、大島サキと、同じく神学科最初の卒業生となった川久保トクの2人による祈りだったことがわかる。『活水学院百年史』には、川久保がこの時すでに信者だったことを伺わせる記述がなされているが⁸⁹、他の資料によれば両者ともこの時点では未信者だった⁹⁰。諸事情を勘案すれば、この出来事を契機に2人共回心したと考えるのが妥当である⁹¹。また、ラッセルとギール女史は常々「宗教とは体験するものであり、イエスが心の中に入ったら人生は変わる」と教えていた⁹²。その夜、2人がそれを求めて祈ると、イエス様がそれに応えて下さったと明言している。大島の回心は、まさにイエスが心の中に入るという決定的な体験だった。その直後の様子をラッセル女史の日記はじつにリアルに記している。すなわち、ギール女史が大島サキにイエスについて問いかけた際、大島は立ち上がって涙を流し、唇ばかりか身体全体が震えていた。その場の状況がありありと目に浮かぶ。

イエスが心の中に入る体験は、言い換えるならばイエスに捕らえられる体験である。イエスとの直接的な一体感を伴ったという意味で、ある種の神秘体験ともいえる。キリスト教の歴史の中で、神秘主義はしばしば異端視されてきた。しかし、そのすべてが否定されてきたわけではない。A.シュヴァイツァーは、神秘的合一（ウニオ・ミスティカ）の対象によって神秘体験を類型化した。大島の場合、

シュヴァイツァーの分類によれば、神秘的合一の対象をイエス（キリスト）とする「キリスト－神秘主義」に極めて近い。シュヴァイツァーのいう「キリスト－神秘主義」は、その主体が神であり人間はあくまで賜物としてこれに与るという特徴をもつ。つまり、体験の所与性が確保されているために、異端的な「神－神秘主義」等とは明確に区別されて、信仰神秘主義あるいは洗礼を受けた神秘主義と位置づけられている⁹³。この体験は大島にとって人生の大きな転換点になった。

さて我々は、「1. その背景」で、2つの宣教師会議とそれを受けて開催された信徒大会の内容を概観した。第一回宣教師会議では「キリストにあって一つ」が合言葉となり、第二回在日宣教師会議では自給伝道論が中心的なテーマとなったが、沢山保羅はイエス・キリストの苦しみに倣い、イエス・キリストのように他者に尽くすことを語った。また、O.ケーリは、第三回全国基督者信徒大親睦会によって、各人の罪についての真の意味がわかるようになり、キリストを自分の救い主として受け入れることの意味もわかるようになり、他人の精神的な福祉を熱心に願うようになったとまとめた。

1883年リバイバルは、キリストにあってひとつとなること、キリストの苦しみに倣いキリストのように他者に尽くすこと、キリストを自分の救い主として受け入れること、つまりイエス・キリストとの関わりの中で生きることが強調された。その流れを活水最初のリバイバルは確実に相続している。

この出来事についてはWFMSに提出された、創立から30年間の歩みをまとめた報告書である *KWASSUI JO GAKKO* のⅢ. The Bible Woman's Training Department, に、前後の経緯を含めて以下のように報告されている。

ラッセル女史とギール女史はメソジスト派の伝統に従って最初から祈祷会 (Class Meetings) を開いていた。彼女たちは宗教とは体験するものであり、イエスが心の中に入ったら人生は変わる、と教えた。しかし礼儀正しく聞いていた少女たちは、この二人は確かにその体験の証人であるということは信じたものの、日本人がそれを受けることはできないと信じていた。1883年5月のある土曜日の夜、大島夫人と他の1人の女性が、この質問について話し合いはじめた。やがて自分たちがこれを試してみてもいないのに、この体験は日本人のためではないと主張するのは正直ではないという結論に達した。そして彼女たちは教師たちの指示に従って祈った。祈り始めると、すぐ熱心に執拗に祈るようになった。12時半ごろ大島夫人は回心した。翌朝、彼女たちはラッセル女史及びギール女史が言っていた救いの個人的体験が真実であり、日本人もこれを体験することができるのと他の人たちに伝え始めた。その日からリバイバルが始まり、学校の全ての女子と学外の38人も回心した。これらは長崎における初めての改宗者たちだった (筆者訳)⁹⁴。

ラッセル女史の日記とこの報告から、大島らの回心は1883年5月第1週の土曜、つまり5月5日深夜 (ラッセル女史の日記では11時半、*KWASSUI JO GAKKO*, によれば12時半と、1時間差がある) から6日日曜の未明にかけての出来事だったことは間違いない。

1883年各地に起ったリバイバルは既述のとおり「祈祷会」「聖霊の働き」「信仰的昂揚」「キリストによる一致」「自主性」「周辺性・底辺性」「体験・実践」という要素を含み、それらがいずれも独立したものでなく、相互に通底し混然一体となって発現した。これらの特徴はすべて活水最初のリバイバルにみられ、全国的なリバイバルの流れを相続している。

やがてリバイバルの中心となった大島と川久保に翌1884年3名が加わり、ギール女史の指導の下に実践的な婦人伝道者 (バイブルウーマン) 養成を目的とする養成組 (トレーニングクラス) が創設された。1887年には神学科として正式な部 (デパートメント) に昇格している⁹⁵。ちなみに、活水が輩出した婦人伝道者の数は、1923年第21回卒業までの36年間で総計56名である。彼女たちが各地で宣教の使命を担った尊い働きの記録は多く残されていないし、卒業生全体に占める割合も決して大きくはない。しかし、その一人ひとりが活水学院やキリスト教界に果たした貢献は計り知ることができない。大島サキは、名実ともにその先頭に位置する卒業生である。

結びにかえて

「The Kwassui」という言葉がある。活水で学び、寄宿舎生活をおくることによって活水精神を体現した卒業生に敬意を払ってそう呼ぶ。大島はその意味で、まぎれもなく「The Kwassui」のひとりだった。

本稿では横浜に端を発する1883年リバイバルについて概観し、活水最初のリバイバルがその流れの中で生じたことを確認しつつ、その発端を開いた大島に注目した。活水における最初のリバイバルの果実として創設された神学科は1923年に閉じられたが、その精神は「祈りと奉仕」を土台とする活水のエートスとして、今も脈々と教育活動に息づいている。大島を含む活水最初の卒業生となった神学科の5名は、いずれもその結晶である。とりわけ大島サキは、その人格的感化及び影響の大きさに際立っている。神学科在学時から福岡女学院の創設に関わり、女学院と関係が深い福岡美以美教会では婦人伝道師の任務を負った。また、卒業後赴任した熊本教会では28年間婦人伝道師として仕えて「教会の母」と呼ばれ、教会外では紫苑会を拠点とする慈善活動に指導的に関わった。活水最初のリバイバルは大島の生涯を貫く強烈な初速となり、祈りによる聖霊の働きに支えられてさまざまな実りを結んだといえる。

さて、活水創立135周年の節目にあたって本稿をまとめることができた背景には、福岡女学院、日本基督教団熊本白川教会、日本基督教団福岡中部教会、熊本YMCA、日本赤十字社熊本県支部、その他関係各方面の惜しめない援助とご助力があった。この場を借りて深く感謝したい。

註

- 1 『活水学院百年史』活水学院, 1980, 55頁。
- 2 小野静雄『日本プロテスタント教会史上』聖恵授産所出版部, 1986, 78頁。
- 3 本多繁『米国のプロテスタンティズムと日本人』丸善株式会社仙台支店, 1991, 所収。
- 4 E.ラッセル著 / 米倉邦彦訳『活水学院の創立者 エリザベス・ラッセル女史の生涯』活水学院, 1998, 31頁に、活水最初のリバイバル祈禱会の後、ラッセル及びギール女史のもとヘカブリー・セミナー（現鎮西学院－筆者注）の創設者ロング師が訪れ「私の所では、今朝6時の祈りの会で、二人の少年が改宗を申し出ました、私は日本人を余り刺激してはいけなく聞いていたのですが、今晚はそのことは無視して、伝道集会にしようと思っています、そこには懺悔者席を設け、告白をする人はそこに座るようにと奨める積もりです、というのでした。師はそのように実行し、30人以上の告白者が与えられたのです」とある。
- 5 本多 前掲書175-177頁。
- 6 佐波亘編『植村正久と其の時代』第一巻（以下『植村正久と其の時代Ⅰ』）、教文館, 1937年, 442頁。
- 7 高谷道夫 / 太田愛人『横浜バンド秘話』築地書館, 1981, 116頁。
- 8 『日本キリスト教歴史大事典』教文館, 1988, 1467-1468頁。
- 9 佐波亘編『植村正久と其の時代』第二巻（以下『植村正久と其の時代Ⅱ』）、教文館, 1938, 548-549頁。
- 10 『日本基督教会 横浜海岸教会史年表（1）』改革社, 1982, 37頁。
- 11 『植村正久と其の時代Ⅰ』442頁。
- 12 中村敏『日本キリスト教宣教史－ザビエルから今日まで－』いのちのことば社, 167頁, 原文はEvangelical Christendom, in *Evangelical Alliance*, (July, 1883) pp. 220-221.
- 13 『植村正久と其の時代Ⅱ』556頁。
- 14 O.ケーリ著 / 江尻弘訳『日本プロテスタント宣教史－最初の50年1859～1909年－』教文館, 2010, 230頁。
- 15 井上平三郎『濱のともしび－横浜海岸教会初期史考－』キリスト新聞社, 1983, 138頁に「この説教は今日も感動なくして読了させ得ない種類のキリスト教大文学」と熊野義孝称賛の辞がある。
- 16 同上145頁。
- 17 同上138-145頁。
- 18 笠井秋生 / 佐野安仁 / 茂 美樹共著『沢山保羅』日本キリスト教団出版局, 1977, 182-183頁。

- 19 同上184-185頁。
- 20 O.ケーリ 前掲書232頁。
- 21 笠井 前掲書181頁。
- 22 同上190頁。
- 23 同上146頁。
- 24 O.ケーリ 前掲書232-233頁。
- 25 『活水五十年史』24頁。主に活水における女子教育の方針と具体的取組及びその成果を中心とするが、活水が基督にあって家族的な教育の場となっていることにも言及している。
- 26 O.ケーリ 前掲書236頁。
- 27 同上234頁。
- 28 『植村正久と其の時代Ⅱ』564頁。
- 29 同上567頁。
- 30 小崎弘道『七十年の回顧』大空社, 1992, 71頁。
- 31 東京大学を中心に影響が大きくなりつつあったスペンサーの不可知論及びダーウィンの進化論に対抗するキリスト教護教のための反論を中心とする内容。
- 32 『植村正久と其の時代Ⅱ』570頁。
- 33 O.ケーリ 前掲書236頁。
- 34 同上。
- 35 同上237頁。Mis. Herald, (September, 1883)からの引用で、オリジナルは *Nothen Christian Advocate*.)
- 36 大濱徹也『明治キリスト教教会史の研究』吉川弘文堂, 1979, 92-93頁。
- 37 『植村正久と其の時代Ⅱ』554頁からの引用だが、原著は星野光多『信仰の復興』1916年、警醒者社。星野は新島襄と共に横浜に上陸して住吉町教會の南小柿州吾を訪問し、1883年のリバイバルについて詳しく質問した。引用文はその際に星野が南小柿から聞き取った一部。
- 38 E.ラッセル著 / 米倉邦彦訳 前掲書30頁等。
- 39 海老沢有道が偶然古書商から入手した同書の写しが福岡女学院に寄贈された。
- 40 海老沢有道は1960年9月『キリスト教史学』第10号に「メソジストの福岡開教—美以美教会・羔血義塾・女子教校の創立」を発表。その論文で「福岡美以美教会史 一」を紹介している。木梨謙吉はそのコピーを海老沢から入手し、1959年「福岡女学院短期大学紀要第20号」に全文を掲載している。なお、原本は立教大学図書館所蔵。
- 41 「福岡美以美教会史 一」谷川日記1885年7月4日に「谷川氏は井上政 上森瑤琪ノ二女氏ヲ伴い長崎より帰崎ル」、12月25日「主降誕ノ祝賀ヲ羔血義塾ニ行フ小藤荒雄 渋谷春 野尻ニ逸 上森瑤琪 井上政 陣野義三郎ノ六氏ヲ推シテ演説セシム会スルモノ七十余名」とある。
- 42 III. The Bible Woman's Training Department, in *KWASSUI JO GAKKO-1879-1929-*, JAPAN TIMES PRINTING,
- 43 Jean Margret Gheer, LETTER FROM MISS GHEER, in *Heathen Woman's Friend*, (March, 1885) p.202.
- 44 職種はKWASSUI JO GAKKO, では「weaving (機織)」とあるが、福岡女学院のLETTER FROM MISS GHEER, には「お手伝い・子守」を意味する「amah」としている。また身分については、KWASSUI JO GAKKO, では、所属階級は高いランクという表現に留めているが、LETTER FROM MISS GHEER, はSAMURAIと明言している。
- 45 Gheer, *ibid.*, p. 202.
- 46 『活水学院百年史』活水学院, 1980, 47頁。
- 47 『福岡中部教会百年史』福岡中部教会, 1985, 21頁。
- 48 『福岡女学院百年史』福岡女学院, 1987, 35頁。
- 49 同上36-37頁。
- 50 同上39頁。
- 51 『福岡女学院五十年史』福岡女学院, 1936, 103-104頁。
- 52 『福岡女学院百年史』39-40頁。

- 53 『熊本白川教会百年史』 熊本白川教会, 1985, 12頁。
- 54 佐藤有美『熊本バンドに続くもの－熊本YMCA十年の歩み』 熊本キリスト教青年会, 1963, 85頁。
- 55 同上。
- 56 『熊本YMCA五十年史－熊本バンドを受けついで－』 熊本YMCA, 2001, 42頁。
- 57 <http://www.shinshoukai.com/sion/>
- 58 『熊本白川教会百年史』 16頁。
- 59 『活水五十年史』 56頁。
- 60 『活水学院百年史』 46頁。
- 61 <http://ouei.sakura.ne.jp/>
- 62 『活水同窓会の歩み』 活水同窓会, 1987, 14頁。
- 63 同上。
- 64 同上111頁。
- 65 同上16頁。
- 66 吉川龍子『日赤の創始者 佐野常民』 吉川弘文堂, 2001, 124頁。
- 67 同上105頁。
- 68 『日本赤十字社 熊本県支部史（総説編）』 日本赤十字社熊本県支部, 1991, 1067－1068頁。
- 69 同上201頁。
- 70 同上203頁。
- 71 同上1068頁。
- 72 黒沢文貴 / 河合利修 編『日本赤十字社と人道支援』 東京大学出版会, 2009, 231－223頁。
- 73 『熊本白川教会百年史』 11頁。
- 74 同上13頁。
- 75 同上14頁。
- 76 同上。
- 77 『福岡中部教会百年史』 55頁。
- 78 『活水学院百年史』 51頁。
- 79 『熊本白川教会百年史』 16頁。
- 80 『活水五十年史』 50頁。
- 81 『熊本白川教会百年史』 34頁。
- 82 同上37頁。
- 83 同上184頁。
- 84 『活水学院百年史』 33頁。
- 85 同上33－34頁。
- 86 同上50頁。
- 87 同上51頁。
- 88 E.ラッセル著 / 米倉邦彦訳 前掲書30－31頁。
- 89 『活水学院百年史』 34頁。
- 90 *KWASSUI JO GAKKO*, p.5
- 91 *KWASSUI JO GAKKO*, では、These were the first converts we had in Nagasaki.と公式に報告されている。
- 92 *ibid.*, p.5.
- 93 拙稿「ティリッヒ神学の神秘思想」1984, いなほ第四号, 横須賀学院, 7頁。
- 94 *KWASSUI JO GAKKO*, p.5.
- 95 『活水学院百年史』 34頁。